
普通戦隊 イッパンジャー イエロー編

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通戦隊 イッパンジャー イエロー編

【コード】

N8149U

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

一般人の俺が、イッパンジャーに選ばれた。今回はイエロー編です。

(前書き)

この作品は、以前投稿した「普通戦隊イッパンジャー グリーン編」の続きです。

けたたましい警告音が、部屋に響き渡る。それから、無機質なア
ナウンスが流れた。

『爆発まで、残り5分』

早急にここから脱出しなくてはならない。そんな俺に襲いかかる、
バカでかい化け物。

治療薬は持つてる。弾薬も。…あとは、俺の腕にかかっている。

「よし来い！！化け物！！！！」

ピンポーン

…俺の気合が吹き飛ぶ、間抜けな呼び出し音。その音で俺は一気
に現実へと戻される。いや、戻されない。ここはスルーする。今大
切なのは、5分以内にこの化け物を倒すことだ。俺はコントローラ
ーを握りしめ、目の前のテレビ画面を睨みつけた。

ピンポーン

出たくない。出てはいけない。

ピンポーン

ピンポーン

ポーンポーンポーンポーン

…しつこい。

俺はポーズボタンを押すと、玄関へと向かった。嫌な予感がする。こういうタイミングでやってくるのは大抵、関西弁の猫だったり、関西弁の猫だったり、関西弁の猫だったりするからだ。

俺は足元を睨みつけながらドアを開いた。ところが俺の予感はおれ、

「ハロー!!!」

金髪長身の女性が立っていて、俺は目を見開いたまま硬直した。

そんな俺の足元から、

「イッパンジャーのイエロー、連れてきたでレッド!!!」

はりきった虎猫の声が聞こえてきた。

「え、あ…」

戸惑う俺の目の前に、笑顔を振りまく金髪女性。背が高くてスタイルが良くて、目は青くて…。俺は周りを見渡す。今日は、ブルームグリーンも来ていないらしい。

まさかイッパンジャーのメンバーに、外人さんが加わると思っ
てなかった。そして困った。俺、英語できないのに。

とりあえず、中学校の時に習った一番簡単な挨拶を声に出してみ
た。

「な…ナイスチャーミーチャー!!!」

それを聞いて、イエローはにぱつと笑った。

「こんにちワ、レッド!!!ワタシはイエロー!!!今年でハタチね!!!」

…日本語ができるなら、初めからそう言っておいてほしかった。

イエローと虎猫を家に上げると、彼女は興奮した様子で叫んだ。
「これ、ユーメイなチャブダイ!!! ひっくりかえすテーブルですネ
!?!」

どこの野球漫画だ。しかし彼女のおしゃべりは止まらない。

「さすがデス!!! さすがはニンジャのヤシキ!!! あの、マドに貼つてあるペーパーは、アングウですか? いいえ、カクシトビラ!?!」
そこは、虎猫が割った窓に段ボールを貼ってあるだけです。ていうか

「なんで忍者!?!」

「ワタシ、イッパンジャーはニンジャって聞いたんだッテバヨ!!!」

!!! 色んな漫画を読んでらっしゃるようだ。しかし

「誰がそんなこと言ったんですか!?!」

「しましまとらのネコちゃん」

名前を呼ばれた虎猫は、背中の毛を逆立てた。それから慌てるように、

「ちゃうねん! ちゃうねんて!」

こちらに向かって走ってくる。... って、

「おま、ちょ、あぶなっ」

「フギヤ!!!」

珍しく、虎猫が転んだ。転んだ理由は、俺がポーズ状態でほつたらかしていたゲームのコンセントに引っかかったからだ。虎猫がつかまっていた拍子に、コンセントが抜ける。ブツン、と虚しい音を立てて、テレビ画面は真っ暗になった。

「あああああ!!!」

俺は虎猫を無視して、ゲームのもとへ向かう。

「お前!!! これ、やっとたどり着いたボス戦だったんだぞ!?! くそ、最後にどこでセーブしたっけ!!!」

「…レッド、わいの心配はせえへんのか。あんだけ派手に転んだんやぞ」

「大丈夫かい虎猫くん？」

「いまさら遅いわ阿呆」

それを見ていたイエローが、拍手しながら叫んだ。

「すばらしいハンザイ！！」

…それが「素晴らしい漫才」の言い間違いであることに気付くのは、少し時間がかかった。

「つまりこのバカ猫が、忍者になれるとか何とか言っつて、あなたをイッパンジャーに誘ったんですね？」

「レッドに馬鹿とか言われたないわ、この阿呆」

「うるせえ。口にガムテープ貼り付けるぞ」

「虐待や！！お姉さん、助けてえなあ。あのお兄ちゃんが怖いこと言っつて」

虎猫は正座しているイエローのもとに歩み寄ると、太ももに頭をこすりつけた。

「カワイソウね。ヨシヨシ」

イエローはそんな虎猫の頭を撫でて、自分の膝の上に虎猫をのせた。な、なんてうらやましいポジション…！！

「なんや、レッド。文句あるんかい？」

ニタニタしたいやらしい笑顔で、虎猫がこちらを見てくる。くそ、くそ。なんて卑怯な…！！

「だけどワタシ、フシギはっけんに思ってたことがアルんですよ」
なんかの番組名が混ざっているが、ここはスルーする。

「なんでしょう?」

これでもしも、『イッパンジャーは忍者なのか』という質問だったら、はっきりと否定しよう。じゃなきゃ、この人がかわいそうだ。彼女は虎猫の頭を撫でながら、首をかしげた。

「この猫ちゃん、なんで話せるんですか?マジョのところの黒ネコちゃんですか?」

残念ながらその虎猫は、某映画の黒猫とは似ても似つかない邪悪な顔である。それにこの猫がどうして話せるのかは、俺だって知りたい。

「それに…この子はオーサカの子ですか?モウカリマツカのことをしゃべってマス」

…つまり、虎猫の関西弁が不思議だと。それも、俺だって知りたい。

「どうなんだ、虎猫」

俺が訊くと、イエローの膝の上でゴロゴロ言ってた虎猫は、ふふんと笑った。

「わいが話せるようになったのは、努力のたまものや。それから、猫は普通、ニャーニャー言ってるやろ」

「ああ」

「あれは猫語やねんけどな。あの猫語、人間の言葉に訳すと全部関西弁やねん」

「は!?!」

つまりやな、と言ってから虎猫はにやりと笑った。

「北海道でニャーニャー言ってる猫も、東京でニャーニャー言ってる猫も、沖縄でニャーニャー言ってる猫も、人間の言葉に訳すと関西弁で喋ってるんや。猫のわいらには、関西弁が標準語やねん」

な、なんとということだ…。つまり

「あの高級な感じのするシャムとか、かっこいいアメリカンシヨートヘアとか、かわいらしいマンチカンとかも、全員関西弁だ?」

「そっや」

…この、やるせない気持ちはなんだ。別に関西弁が嫌いなわけではないが、なんでこんなに物悲しいのだ。

「オオ！ーニッポンの猫ちゃん、みんなモウカリマツカ!？」

「そやそや、もうかりまつかー」

「ボチボチデンナー」

「うまいうまい」

「…その儲かりまっかって、関西でもそんなに使われてないって聞いたぞ」

俺が突っ込むと、

「猫の世界では使っんや!ーお前、イエローの夢を壊すんやない!ー」

恐ろしい形相で怒られた。

虎猫が新メンバーを連れてくると、なんでか怪獣が出現する。今回もそうだ。そして今回の怪獣は、ゴリラとクジラを足したような名前の怪獣にそっくりだった。ただし、身長は2mくらいしかないけど。

「そこまでだ、メンストウアー!ー!!」

いつも通りのブルーのセリフ。それを聞いたイエローの反応は、

「オオ!あのMonsterはメンストウアーって名前デスか!ー!」

…違うんだ、イエロー。ブルーはあれで、モンスターと発音しているつもりなんだ…。

「そうだ。あの怪獣はメンストウアーだ。メンストウアーという名の、怪獣だ」

さらっと命名してんじゃねえよブルー。

俺、ブルー、グリーン、そしてイエロー。全員で「変身するので

「10秒待ってください」と宣言し、4人横並びで変身。もちろん変身ポーズは、バンザイしながら左足をあげる、某お菓子のパッケージポーズだ。泣きたい。毎回のことだけど、このシーンが一番泣きたい。

変身後。武器、と聞いた時のイエローの反応はすごかった。

「シュリケン!?マキビシ!?カタナ!?」

∴もちろんイエローの武器も、金属バットである。

「あとからカタナになるンデスカ!?それともナギナタ!?」

申し訳ないが、金属バットは金属バットのままである。

「そういえば、イエローのバットのエフェクトは何なんだ?」

俺が虎猫に聞くと、虎猫はふふんと笑った。

「フラツシュや。眼潰し。ただしイエローのエフェクトは、持続せ

えへん。発動時間はほんの一瞬や。せやけど結構、強力やで」

「へえ」

「どうやるンデスカ!?!」

イエローはやる気満々だ。∴エフェクトを使っても、金属バットは金属バットのままなんだが。

「フラツシュって叫べばいいんやで〜」

∴猫なで声で猫が喋った。この野郎、イエローの前では可愛い子ぶるつもりか。

虎猫のアドバイスを聞いたイエローは、バットを天に向かって振りかざすと

「フラツシュ!!!」

何のためらいもなく、叫んだ。

イエローが叫んだ瞬間、バットが光った。光ったなんて可愛いもんじゃない、目も開けていられないほどの閃光。

イエローの隣に立っていた俺は、その光をモロに食らった。

「ぐあー！め、目がー！」

俺は目を押さえて、そのまま倒れこんだ。

「ちょっ、レッドさん！？目を閉じてなかったんですか！？」

驚くようなグリーンの声と

「馬鹿だからな」

呆れたようなブルーの声。この2人は、ちゃんと目をつぶっていらしい。そ、そうか。目をつぶっておけばよかったのか…。

「ま、次からはちゃんと目をつぶるんやな。…レッドってば、はずかしー」

「しましまとらの猫ちゃん、泣いてるの？ダイジョウブ？」

「大丈夫や。ちょっと眩しかっただけやねん…」

お前もモロに食らってるじゃねえか。

この後なにが起こっていたのか、俺にはよく分からない。というのも、しばらくの間まともに目を開けていられなかったからだ。

「リア充爆発しろおおー！」という声が聞こえたので、ブルーがとどめを刺したらしい。その言葉を聞いたイエローが、「ワンダフルなワザですネー！」と拍手していたが、どこら辺がワンダフルなのかを後で詳しく教えていただきたい。

「いやはや、見事な戦いっぷりやったでー！わい、感動しすぎて泣いてしもたー！」

虎猫が赤く充血した目で笑った。お前も次からはちゃんと目を閉じておけよ、と内心で突っ込む俺の目も真っ赤である。

「残るはピンクやな。ま、そのうち連れてくるから気長に待ってなー」

いやもう解散しようよ。俺の心からの言葉は届かず、虎猫はどこかへ行ってしまった。

「レッド。…君は今日、なにをしに来たんだ？」

そんなの俺だって聞きたいぜ、ブルー。

「早くリーダーっぽく活躍できるといいですね、レッドさん!!」

グリーン。君はいい子だが残酷だ。

「ワタシ、感動しました!! イッパンジャー、スバラシイ!! ニンジャの進化ヴァージョンね!! ワタシ、イッパンジャーになれてよかったデス!!」

それはよかったな、イエロー。次回からはフラッシュを使う前に一言くださいお願いします。

子供たちのあこがれ、イッパンジャー。その活躍は、…誰も知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8149u/>

普通戦隊 イッパンジャー イエロー編

2011年7月13日03時40分発行